

故学園長浅井淑子教授を偲んで

著者	梶浦 善次
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	14
ページ	1-6
発行年	1980
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001910/

故 学園長浅井淑子教授を偲んで

学 長 梶 浦 善 次

I 先生の業績と影響の大きさ

学園長・浅井淑子教授が急逝され、私たちが大きなショックを受け悲歎の涙にくれてから、すでに10カ月を経ている。「去る者は日々に疎し」といわれるが、先生の場合には、この言いはあてはまらない。東京で、急逝の報らせをうけたときの衝撃、故人となられた先生との対面、雪の降りしきる中でのお通夜と告別式そして学園葬など、それぞれの場面は、昨日のように生々しく脳裡を去来する。そして学校の動きの何かにつけて、先生の姿が浮び、偉大な学園の支柱、かけ替えのない教育の原動力が失われたことを痛感するのである。

偉大な服飾文化界のリーダー、私学経営の先達、そして幅広い社会教育家としての先生に対する敬慕は、決して私たち直接先生に親炙し、ご指導をいただいた学園関係者の私的な感情ではない。そのことは先生の没後ただちに贈られた、正六位勲五等宝冠章という国家的榮譽が語っており、またこの秋9月、北海道知事より受けた「北海道開発功労賞」という本道最高の榮譽が、これを示している。

先生の本質ともいうべき社会的教育者としての輝かしい活動、業績についての客観的な記述は、他の場所にゆずりたいし、また実際この追悼号において古瀬教授が担当しているので、私は全く私の個人的な思い出と先生の偉大な業績の原動力であったその人間的秘密とでもいうべきことについて、若干の私見を述べるにとどめたい。

II 私と先生一父兄として、教育運営の先達として

私が先生を直接に知り、お近づきになったのは、昭和30年9月であった。先生が10カ月にわたるヨーロッパでの研修生活から帰られた翌年のことである。私は、アメリカ国務省の人事交換計画のグランティーとして、アメリカの教員養成大学を訪ね、同時に幼稚園、小学校、ハイ・スクールなど普通教育や社会事情を視察して6月に帰国したばかりであった。このとき教師のために異色ある教育の総合雑誌を発行していた教育新潮社が、一般社会人のために開催していた「教育の夕べ」という集いに、先生と私を講師として選定したのであった。札幌の中央創成小学校で行われたその集会の記憶は、今はほとんどうすれてしまったが、先生の堂々とした体躯と華やかであるがよく調和がとれた気品の高い服装は、まず私の目を引いた。それよりもヨーロッパにおける家庭生活とくに子どものしつけについてのお話の内容とさわやかなしきもしきとりと人の胸に沁み入る話しぶりは、大きな感動を与えたのであった。私も先生の尋常でない見識と洞察には、心からの敬意を禁ずることができなかった。

私は、それまで当時斬新であった生徒の制服やヴァレー・ボールやバスケット・ボールなど

運動に強いということで、わずかにドレス・メーカー学院という名前を知っていたに過ぎなかったが、この機会を通して浅井淑子先生という秀れた人格に結びついたものとして強い関心をもつものとなった。また先生は、これを機縁に、当時私が校長であった、そしてまた先生ご自身の母校でもあった北海道学芸大学附属札幌小学校に、ご令息とご令嬢をおくられ、指導的なPTAのメンバーとして活動された。長男幹夫氏は、附属中学校から、これもまた私がたまたま転出して校長であった新設の札幌旭丘高校に進学され、前後10年に近い間有力な父兄として、ご援助をいただいたのである。

その後、昭和44年に本学に初等教育学科が設置されると、北星大学に勤務していた私は、教材研究社会の非常勤講師を委嘱され、さらに47年より正式に教授として任命され、教育学関係の講義を担当することになった。「教育の夕べ」における機縁が熟して来たるべきところに到達したとの感が深い。人間の出会いとか結びつきというものは、人間の思議を越えたものがあるように思う。私は運命論者というようなものではないが、自分の教師としての最後の仕事を、この短大においてなし、浅井先生に親炙することができたことは、何か運命的なものを感じずにはいられない。

Ⅲ 先生の人間的本質について

本年1月4日先生急逝の報道は、直接と間接を問わず、先生を知る人びとにとっては一大衝撃であった。「あの浅井先生が」という会話はいたるところで交わされ、戦後における北海道を代表する傑出した人物のひとりが失われたという感を深くしたのである。告別式の参列者2,000人に近く、1,000通の全国各階よりの弔電は、先生の活動がいかに大きく、人間的交渉がいかに広がったかを如実に示したものであった。今日わが国の平均寿命は急速に伸び、今や女子は78才を数えるにいたった。このような状況にあって、先生の63才という生涯はむしろ短いものであったのであるが、この大きな業績と人びとに与えた影響に私は目を見張らざるをえないとともに、その人間的な要因に思いをはせ、それを考えざるをえないのである。まことに主観的な印象に過ぎないのであるが、その若干にふれつつ、先生の業績を敬慕したい。

先生の足跡を辿って、第一に気づくことはその強烈な自己形成への意志である。その生涯は自己を深く向上しようという不断の精進そのものであった。先生は小学校を終えるや、叔父西岡憲儀氏の経営する小樽の緑丘高等女学校に入学したが、1年生の後半は、目の病気のため長い休学をせざるをえなかった。そのために同輩よりおくれることになるので、東京の国華高等女学校の編入試験を受けて2年生に入ったのである。空白を埋めつつこの試験を受けることも容易でなかったが、2年生の授業についていくためには、ひと一倍の努力が必要であった。このような学習の努力の中で、さらに高度な勉強をつづけようという理想が成長したものと思われる。

鋭敏な感受性をもった先生は、当時の周囲で見聞することから、女性も独立して社会的活動をしなくてはならないという考えを、かなり早くから感じていた。そして女医として立つこと

を決意して、女学校卒業と同時に東京女子医専の試験を受けて合格した。しかし「女子に高等教育は不要だ」という両親の許すところとならなかった。しかもその理想を抑えることができず、家事の手伝いをしつつ、学資を蓄え、昭和12年ふたたび上京し、現在の杉野学園、その当時の東京ドレス・メーカー女学院本科に入学、服飾の専門家として立つこととなった。家からの仕送りを頼ることができず、アルバイトの洋裁によって、学業をやり遂げたのである。3年間にわたる修業をつみ、昭和14年6月この師範科の卒業生として巣立ったのであった。卒業して帰札すると同時に、かねての理想を実現すべく、先生は洋裁学校「北海道ドレス・メーカー女学院」を開設する。この開設に当って示めされた先生の情熱と創意は、まことに驚歎すべきものであるが、ここでは割愛したい。しかし20才をわずかに越えた若さで、困難を打開しつつ自己の理想の実行に邁進したことは、瞠目に値するのである。

先生の高い理想と教育的熱意は、開校間もなく世人の注目するところとなったが、戦時のいろいろな困難を経て、この学校は、戦後の女性の教育的要求に応えるものとして声価が高まっていった。しかも先生は決して、小成に甘んずることはなかった。25年10月、東京ドレス・メーカー女学院に新設された「デザイナー科」に入学を決意され、三たび上京して、6カ月間その研究を深められたのであった。長男幹夫君は2才、長女洋子さんは、その年の2月に生れたばかりであった。洋子さんの誕生のときの産褥熱で、先生の頭髮は真っ白に変わっていた。

先生の自己形成への意欲にふれるならば、ヨーロッパにおける研修旅行は特筆すべきことであろう。昭和28年9月から翌29年7月まで、単身フランスに渡り、パリのオート・クチュールで研究するとともに、その間ヨーロッパ11カ国に足をのばし、衣食住の生活はもちろん、家庭教育あるいは幼稚園教育などについてもその見聞を深められたのである。占領時代から、各界の代表者がアメリカの招待でその見学の旅行にでかける機会ができてはいたが、未だ一般人が誰でも自由に海外に出かけるような事態ではなかった。こうした時代に、海外に眼を向け、広い視野に立って、服飾文化の世界的先端で研修し、その成果を教育に生かそうという発想は、尋常ならざる見識と強い決意を必要としたことである。先生はすでに36才であった。風俗や習慣など生活様式のちがいやことばの問題など困難はたくさんあった。女性単身の長期にわたる海外生活である。大きな冒険であった。後にはご主人と5才と3才になったふたりのお子さまがいた。この壮挙ともいえるべき長期の海外研修は、ご主人猛氏との間の相互の深い愛情と理解がなくては、とうてい成立しえなかったことはもちろんであるが、私はその根底に先生の自己形成への不屈な意志を認めざるをえないのである。尋常な人間のよく実行しうることでなかった。

自己を深めるための努力は、幅広い社会的な活動に寸暇もなかった晩年にも、いささかも衰えなかった。研究紀要における毎年の発表、NDCその他の展覧会に対するおびただしい指導的作品の発表は、それを端的に語っている。先生の自己形成への努力は決して専門的な服飾の世界に限られなかった。それはその土台である人間の理解に向けられた。読書だけでなく幅の広い人びとの接触による見聞が深く融合して、先生は稀れな教養人であった。先生の講演の魅力

は、その専門的知識だけでなく深い人間的な洞察に由来するものであったことは否定できない。

次に、私は先生における仕事への情熱をあげたい。これは上に述べた自己形成への意志と表裏をなすものであるが、情熱というよりは仕事への使命感あるいは義務感というのがより適切である。このことに関しては、札幌旭丘高校の校長として直接に私が体験したエピソードを忘れることができない。私は、女子生徒の制服の選定を先生にお願いした。先生が制定されたものは、それまであったセーラー服やスーツの類とは全くちがった斬新なものであった。成人に入る前の青年期の女子の特性を考慮し、形の美しさとともに簡素さ、さらにスーツにも容易に改造しようという将来の利用まで、こまかく考えられた画期的な型の制服であった。制服の色は紺、白いシャツの襟は、やや細目の臙脂色のネクタイをあしらったものであり、清楚で華やか、品格の高いものであった。先生が最後まで苦心されたのはネクタイの色であった。札幌の材料店に在庫の品を全部しらべたが、先生の気に合うものがないというので、東京や京都から取りよせて種々検討を重ねて決定されたのであった。ネクタイの幅がもう少し広く、またその色がもう少し赤みがかってそれより濃くなっても印象が全くちがったものとなることは、その後これを模倣してつくられた若干の高校の制服を見れば自らに理解される。先生は人一倍秀れた感受性をもっていたのであり、またそれだけ線や形や色の一点一画にも苦心されたものであろう。私は、先生の服飾に対する見識とセンスの豊かさと鋭さに驚歎するとともに、一本のネクタイにもあれほどの苦心をされた先生の良心的な仕事に、先生への尊敬の念を新たにしたのであった。

先生が創設されたドレス・メーカー女学院は、当初から単に洋裁技術を教える学校ではなかった。それは、先生のことばによると、「単に縫い子や針子を育てるのではなく、洋裁を通して人間性を図る」ものであり、この基本的な考えは終始一貫したものであった。公立の学校と変らない学校を、ということで定員を厳格に守るとともに、実践倫理や音楽もとり入れられるとともに体育活動も奨励された。その後鉄筋コンクリート5階という近代的校舎をつくり、高度な専門的教科のほかに教育、文学、英語、フランス語、体育など一般教養学科にも重きをおき、私学経営の画期的なモデルとなったのである。これは先生のつねに一歩進んだ遠見を示すものであると同時に、先生の徹底した仕事への良心によるものなのである。

先生の大柄な堂々とした体軀にもかかわらず、何回かの大きな病気にかかり、療養を余儀なくされたが、その中でも仕事を完全に休止することはなかった。この仕事への情熱は晩年には宗教的信念に基づく使命感となった。「もうすこし休息されては」という周囲の人たちのことばに対しては「仕事をしなければならぬというのも、まだ神さまが命をお与えなされている証拠です」という答が返ってくるだけであった。病気が回復するや—先生にはほんとうに全快ということではなかった—、療養中の遅れを取り戻さねばならないかのように一そう多忙な生活に帰った。私たちが襟を正さざるをえない底のものであった。

最後に、私は人間的な愛情の豊かさと深さを、先生の人格的特色としてあげなければならない。先生は自分や仕事に対してはきわめて厳しく徹底的であったが、他の人びとに対してはや

さしい愛の実践者であった。堂々とした体軀、年令以上に見せた白髪などの外見から、また学校経営者としての成功、社会的な幅広い活動から、人はしばしば、先生を女傑であるという印象を受けた。しかし身近く先生に接した人びとにとっては、それはほど遠いものであった。つねに微笑をたたえた明るく朗かな先輩であり友人であった。先生の魅力は、この明るさと快活さにあった。先生が、生徒に示したモットーは「明るく、正しく、らしく」であった。

先生の人間的な愛情は、いたるところできわめて自然に現われた。自ら病弱で入院しているときでも、入院患者の誰かれを問わず、ことばをかけて慰めた。不自由な人に本をよんでやり、食物を口に運んでやるなど、さまざまな形で他の人たちに奉仕し、自分を忘れて、人びとに光明を与えた。札幌医大病院で知り合った小神須美子さんという若い女性との間のエピソードは先生の人柄を示すものとして忘れられないものである。

この女性は、18才のとき血管腫のため歩行困難となり、不治の病と診断されて、希望なき療養生活を送っていた。先生は、入院中この女性を知り、その闘病日誌をよんで感激し、これを激励、主治医の河邨教授と一しょに世話をし、東京の出版社より「終りなき命を」という書物として出版させたのである。この書物を基にして映画もつくられた。この出版記念会や映画の座談会への出席は美談として車椅子の先生の写真とともに大きく報道されたのであった。先生は、後援者としてこの女性を最後まで援助激励していたのである。

先生ほど、手まめに手紙を書いた人は余り多くないであろう。思い出を語り、感謝し、忠告し激励して、人びとの心の交流を忘れなかったのである。学園に勤務する教職員のひとりひとりの誕生日を記憶され、記念品とともに感謝や激励のことばを贈られた。私自身、非常勤としてお手伝いをしていたとき、これをいただき驚いたものであった。学生の集会や教職員のインフォーマルな会合にも、時間をくり合せて出席された。そして率先して、会合の明るく楽しい雰囲気をつくる原動力となった。学園における「愛と和」の伝統は、先生の人格からの自然な現われであった。

先生のこの人間的な愛情を、先生の義兄である神父浅井正三教授は、「神の信仰に基く母性愛」であったと道破された。その本質をついたものであると思う。先生は、終戦の翌年最愛の妹と弟など身近な方を前後して失なった。このような人生の悲痛な体験を通して、浅井神父の導きによって信仰の道に入った。先生は信仰によって慰められ勇気づけられるとともに、先生の社会的活動を、神によって与えられた使命であると感じたのではなかったか。先生は自分の信仰について語られることはなかったが、晩年の多忙な生活を「神によって生命を与えられているかぎりには」といって、安易な休息をとろうとしなかったことは、十分にこれを証明するものであろう。先生のご生涯とその輝かしい数々の業績は、結局は信仰に基いた人間的愛に由来し、それに包まれたものであったのである。ゲーテは歌った。

「汝の生を愛のうちにあらしめよ。

汝の生活を努力の生活たらしめよ。」

これこそが、まさに浅井淑子先生の生であり、その業績の根源であった。先生こそまさに真の

人間一個性的にして普遍的な生ける人間であった。私はこのように観じ、改めて敬慕の念を新たにしながら筆をおくのである。